小說　二人の家

永代美知代

――兎も角も、當方に姑上さへ無くば、子達のお守りや何やして頂いてよろしく、どうにもしてお引受け申し、出來るだけのお世話致し度く、主人も左樣に申し奥れ候らへども、何分にも姑上の思ひくもあり、すでに母上樣急に臺灣より御いなされ候が、姑上のお氣に入らず、それ以來うちはごてつき候やうの有樣にて、何事も思ふにまかせず、御察し下され度く、登ひ料を送るからと必御申越し、母上樣があの通りの方にて候へば、兄上樣も定めし何彼と御心遣ひ遊ばされ候事と存じ上候、然りながら思へば母上樣も御不運な方に候、殊には今度の臺灣行きが餘程藥に相成り候ものと見え、他人の中にてお氣兼ねなされ候ことと、少しは世の中と云ふものも解り、以前の母上樣の事を思へば、まるで人違ひ致し候やうに御座候――

最後に來た妹の返事は斯うであつた。秋山はどうにかして妹の手に母を預け度い、我儘な母を此方に引き取るのは、家庭の圓滿を缺くものだと考へるのであつた。妻の浪賀子は赤い酒、青い酒と、所謂新らしき女のやうに、五色の酒こそ飲み分けないけれども、譯の分らぬ姑の云ふなり、どうにでもなつてゐるやうな女大學式の女ではない。如何したつて舊派と新派と、我の強い二人の女の間に爭鬪の初まるのは解り切つたことである。それに第一、秋山それ自身の感情が、餘りに母から離れ過ぎて居る。十二の歳父親に死別れて、田舍の祖父に引き取られるやうになつてから、その當、九つの妹と自分と、二人の子供を置いて再緣した母に對して、それから再緣後の母の行動等に對して、秋山は子供心にも甚だあきたらず思つてゐた。再緣先きの良人と云ふのは、母とは親子程も年の若い、おまけに、母の實家の親類の番頭筋にあたる男であつた。さうした男と、如何云ふ譯で結婚することになつたものか、委しい事情は知るよしもなかつたが、祖父を始め、親類の誰彼は皆母の再緣をよくは云はなかつた。

その後その男には、先妻の子供が二人もあつて、里子にやつてあつたそれを引取るに就いて、母が文句を云つたり、夫妻の感情が荒むにつれて、出るわ入るわのもの云ひが幾度だつたか、秋山は中學時代から、母の左樣した問題に煩はされてばかり居るのであつた。元々男の方では、慾にかゝつた結婚らしく、女の持ち物が無くなつて、年が寄るに從つて、慾〻殘忍な態度に出るのであつた。そのつど、母は二人の子供にあて、身の振り方を相談し、此儘に居ては、今にも殺されさうな、長い手紙を書いてよこすのが常であつた。殆んど二十年以上も、神戸の××教會の執事を勤めるほど、熱心な基督教徒の家庭に嫁いだ妹は、母のふしだらを辛がつて、舅の力を借りて、悶着の度毎別れ話に骨折つた。どうせ男から捨てられて、浴衣一貫で追出されたのでなくては、母は男から離れることは出來ないと云ふのが、秋山の母に對する觀察であつた。神戸の妹の舅達は、秋山を冷淡な男のやうにも噂しあつた。だが幾度別れても、何時の間にか一緒になつた。併し秋山の豫言通りの日が來て、男は五十越した女の、一寸とついて行く事を躊躇ふやうな、遠い南洋へ出稼ぎすると云ひ出した。そして母は體よく見捨てられてしまつた。

取り敢へず妹が引き取つて、其時から東京へ迎へるやうにと、度々手紙が往復された。此方へ呼ぶとも呼ばないとも定らぬうちに、母は如何しても臺灣の

へ行き度いと云ひ出した。裁縫の上手な母は、内地と違つて臺灣は仕立賃も高いから、出稼ぎ旁々出掛けて見度いと云ふのであつた。それには幸、以前から親しく交際してゐたお婆さんで、臺北の娘の處へ行く恰好な道連れもあつた。妹の勇は最初から絶對に不賛成であつた。聞くところによると、南洋へ行つた筈の男が、臺灣にゐると云ふことであるから、多分はそれを尋ねて、また元になる積りか何かで、渡臺されるものらしい等と、秋山の處へさうした手紙を送つても來た。だが肝腎な母が、今以て男に未練のある以上、如何することも出來ないと云ふのが多年の經驗から割出した秋山の態度であつた。成るようになれと、薄給の中から都合して旅費を送り、やつと彼方へ行きついて、一ヶ月經つか經たぬに、臺灣は思つたほど面白くない上に、諸式が高くて暮し難いから、歸り度いと云つて來る。無論そんな勝手な云ひ分には一々取り合ひもしなかつたが、今度は悪性のマラリヤに罹つて入院したから、金を電替爲替で送れと云ふ電報、病氣と云へば捨てゝも置かれず、年末の苦しい中から命合通りの金を送つて、やつと一安心したかと思ふと、一月の中旬、突然神戸まで歸つてゐると云ふ通知なのであつた。それから妹の家に世話になつてゐたのを、引取れ――そちらへ預け度い――秋山は母の事を考へるだけでも苦々しくつて堪らない。

書齋の椅子に腰掛けて、煙草をふかしながら、靜かに窓の外を見た。郊外の山の手電車の線路に沿うた其家の周圍には、美しく色づき初めた櫻の若木が幾本となく植ゑられた。つい目の下を小さな小川が流れて、子供を背負つた妻の須賀子が、その岸の緣で土筆を摘んでゐる。

秋山は卓子の上の萬年ペンを執つた。そして次ぎの如く書き出した。

拜啓、御申越の件々一ヶ御道理更掛に存じ候。此上は早速當方に引取るべきには候らへども、小生も一家の平和を思ひ候らへば、些か躊躇致し候ふしも有之、御手紙の趣によれば母上

上も大分我が折れたらしけれど、須賀子との折合も如何と、實は掛念に堪へず候、就いては お宅へ同居と云ふのでなく、御許御兩親樣の慈書の下に、何處か御近所の然るべき家へ下宿でもすると か、或は又、間借りでもして貰ふことにして、是非今暫らく御地へ置いて、頂き度きものに存じ候、母上樣も是々思ひ通りの生活を御繼みなされ無事とて、今の今此方へ引取られ、離居暮らしをなされ候も不自由なるべく、御承知の通り、いまだ大した收入もなき小生の身分として、母上樣御要求通りの送金は致し兼れ候らはんも、御許御兩親樣と御相談の上にて、いるだけの金は何とかしてお送り致すべく、今一度御寛入とも御相談下され度く、折返し御返事待ち入り候――

斯う書いて來て、讀み返してゐると、須賀子が階子段を上つて來た。

『御覽なさい、こんなに澤山！』

ガラリと上り口の障子を開けると一緒に、山のやうに盛つた土筆の筐を突き出した。

『ホウ、晩のおかずになりさうだね』

手紙を片寄せて妻を迎へた。

『子供は？』

『寢ちやつたから、下へ寢かして來ましたわ。ね、御覽なさい、こんなに長いのよ』

須賀子は秋山と差向ひの椅子に腰掛けながら、五寸、六寸と、長いのを四五本拔き出した。

『俺も手傳つて、ハカマをとつてやらう』

『え、だつてお手が汚れてよ』

『好いさ』

二人は筐を眞中に、默つてハカマをとつてゐた。

『お讀みになつてたもの何？』

『ナニ、手紙さ』

『何處から來たの？』

『これから出すんだ』

『さう何て云つて？』

『つまりね、此方へ引取る事には行かないからお前の處で預れないなら、傳處か他へ下宿でもさせて呉れろつて、さう云つてやるんだよ』

『まあ、隨分ね、その手紙一寸とお見せなさいよ』

『見なくたつて可いさ』

『見たつて好いでせう、いけませんの？』
『いけない譯はないさ』
秋山は手紙を執つて、須賀子に渡した。一通り讀み了ると、須賀子はそつと吐息した。
『いけないわ貴郎、こんな手紙およしなさいよ、ね、阿母さんを引取りませうよ』
『馬鹿な』秋山は聲をひそめるやうにして『要するに十三圓か十五圓の問題なんだからね、その位でお互の平和が保てれば可いぢやないか』
『お金なんかの事云つてやしませんよ、それよりも私、私のせいで引取らないやうに思はれるのは嫌ですわ』
『だつて俺が嫌なんだから可いぢやないか』
『いや、須賀子との折合如何と、掛念に堪へず候、と書いてありますよ』
『いけなければ其處だけ取り消しても可い』
『――ねえ一寸と、いつその事呼びませうよ、その方が好いわ』

家　（第壹卷第六號）……一三

『併しよく考へて御覽、後で困るよ』
『だけどもねえ――』
さう云つたまゝ、須賀子は默つて考へ込んだ。と何に驚ろいたか、子供が急に泣き立てた。
『兎に角、その手紙出さないでね』
あわたゞしく云ひ置いて、須賀子は下へ降りた。
子供に乳房を含ませて、寢つかせながら、須賀子は、それからそれへと姑の上を考へた。義妹の手紙で見ると、姑も大分以前とは變つてゐるらしい。子供も段々目が放せなくなつて、手の無い處ではあり孫の守り旁々、來て貰はうかしらとも考へるが、その直ぐ傍からいや〳〵と反對な氣分が持ち上る

――

須賀子は姑と云ふと、必らず、或る怖ろしい連想をおもひ浮べる。それは須賀子の姑に對する最初の印象で、初對面の時の事であつた。
須賀子は結婚前から、秋山には唯一人の母があつて、再緣後兎角不仕合せな身の上なことも、聞かさ

皆なの評定にまかせて、須賀子は別段何とも口を出さなかつた。三日、四日、五日と過ぎても、ねつから適當な家が見つからない。秋山は神戸に着いて其翌日から役所へ出勤しなければならず、乳兒を抱へた須賀子は一向土地不案内で、ものゝ役にも立たない。自然妹婿一人を煩らはすやうな事にもなつた。毎日のやうに方々見つけ歩いて呉れるのだけれど、秋山の注文に近いやうな家は、家賃が高かつたり、敷金が多かつたりと云つた譯で、氣短かな秋山の方で却つて、毎日の報告を聞くのを、うるさがる程であつた。
『敷金が多いのは困るが、間取りなんぞ大抵でよゞざんすよ』
『いや、まあま今少し氣長に、自宅の二階で御辛抱なさい、其内には屹度好いのを探しますから』
產後の長旅に疲れ切つた體を、大勢の中にゐて、おち〳〵横にもなれぬ須賀子は焦立しい思ひをしながら、出來るものなら、いつそ何處か他の二階借りでもしたいとさへ思つた。
秋山を役所へ送り出した後を、須賀子は子供に乳をやりながら、玄關兼茶の間と云つた三疊の間の長火鉢の傍で、ぼつねんと坐つてゐた。
『其枝々々、こまかいのんか無いさかい、車代取り替へてんか』
と言ふ聲がする。妹の家は露地の中を奥深く入つて來るやうな家であつた。見たところ四十前後の、前髪をふつくら出した束髪に結んだ色の白い、鼠縮緬の三つ紋の羽織を着流した品の好いのが、いきな手提袋と、蝙蝠傘を持つて、嵩張つた風呂敷包をさげさせた車夫をつれて此方へ來る。五十過ぎだと聞いてゐた年にしては些と若過ぎるとは思つたけれど須賀子には直ぐに姑だと氣がついた。と、横手の共同水道の處で、子供を相手に洗ひ物をしてゐた妹が出て來た。
『まあま阿母はんかいな　濡れた手を前掛けで拭きながら『ようまあ、お入りやす』

この上は警察の力を借りても、お前の方へ引とられ候らへば、左樣御承知被下度く――と云つたことがくど〳〵書いてあつた。やつと產屋を出たばかりの蒼白めた須賀子の顏にも、さつと血が潮した。

『寒い時だからと思つたのですけれど、いつそ引取りませうよ、ねえ貴郎』

『ナニ、又喧嘩の腹立まぎれに書いたんだよ、本當に別れる積りはないんだ。併し困るね實際、役所へあててこんなハガキをよこされちやね』

併し幸と、それから間も無く、秋山は神戸に榮轉することとなつた。あのハガキで見ると、今の今にも出て來さうな樣子であつたが、姑からはそれつきり、變つた通知も來なかつた。早速榮轉の事を知らせて、神戸の妹婿には、何處か山の手に然るべき家を借りて貰ふやう、依賴の手紙を送つて置いた。

兼ねて見知り越しの妹婿に出迎えられて、須賀子は產後の長旅に疲れ切つた體を、三の宮驛から一先づ諏訪山下の妹の家へ落着いた。その頃妹夫婦は親達と別居してゐて、舅姑は元町の店の方に住んでゐた夫婦に三つになる男の子一人、それに好意上敎會の婦人傳道師を一人預つて、八疊の二階一間に、六疊と三疊の下座敷へ、秋山夫婦に當歲の赤ん坊が一緒に居るのは、隨分狹つ苦しい。婦人傳道師は秋山等の爲めに、恰好な家が見つかるまで、二階の部屋を明渡し、食事だけを一緒にして、夜は元町の店の方へ行く事にしてゐたが、須賀子はせゝつこましい處で、朝晩のおしめ洗ひにも、かなり氣を兼ねた。

『此間からもう、大阪の阿母さんが待ち兼ねて、まだか〳〵と訊いて來られましてな』

妹婿は一寸とハガキで知らせようと云ふのであつたが、秋山は家でも出來た上の事だと、無理と樣子を知らせなかつた。

『ほんまだつせ、こないに狹い處へ、阿母さんまで來て、八釜し云ふたつたら、あつかましおますがいな』

『それもさうやな』

貴なの評定にまかせて、須賀子は別段何とも口を出さなかつた。三日、四日、五日と過ぎても、ねつから適當な家が見つからない。秋山は神戸に着いて其翌日から役所へ出勤しなければならず、乳呑兒を抱へた須賀子は一向土地不案內で、ものゝ役にも立たない。自然妹婿一人を煩らはすやうな事にもなつた。毎日のやうに方々見つけ歩いて疲れるのだけれど、秋山の注文に近いやうな家は、家賃が高かつたり、敷金が多かつたりと云つた譯で、氣短かな秋山の方で却つて、毎日の報告を聞くのを、うるさがる程であつた。

『敷金が多いのは困るが、間取りなんぞ大抵でよこざんすよ』

『いや、まあま今少し氣長に、自宅の二階で御辛抱なさい、其內には屹度好いのんを探しますから』

產後の長旅に疲れ切つた體を、大勢の中にゐて、おち〳〵横にもなれぬ須賀子は　焦立しい思ひをしながら、出來るものなら、いつそ何處か他の二階借りでもしたいとさへ思つた。

秋山を役所へ送り出した後を、須賀子は子供に乳をやりながら、玄關兼茶の間と云つた三疊の間の長火鉢の傍で、ぼつねんと坐つてゐた。

『其枝々々、こまかいのんが無いさかい、車代取り替へてんか』

と言ふ聲がする。妹の家は露地の中を奧深く入つて來るやうな家であつた。見たところ四十前後の、前髮がふつくり出した束髮に結んだ色の白い、眼縮緬の三つ紋の羽織を着流した品の好いのが、いきな手提袋と、蝙蝠傘を持つて、嵩張つた風呂敷包をさげさせた車夫をつれて此方へ來る。五十過ぎだと聞いてゐた年にしては些と若過ぎるとは思つたけれど須賀子には直ぐに姑だと氣がついた。と、横手の共同水道の處で、子供を相手に洗ひ物をしてゐた妹が出て來た。

『まあま阿母はんかいな』濡れた手を前掛けで拭きながら『ようまあ、お入りやす』

『車代拂ふてんか、何ぼやしらん、三の宮からや』
『へい、よろしおます』
妹は一歩先きに驅け込んで、簞笥の小引出をガチャつかせてゐたが、直ぐ又出て行つた。
『阿母さんですの？』
上りがまちの處で呼び止めて須賀子が訊くと、聲をひそめて、そゝくさ、
『へいな、待ち兼ねてなあ、返事出さんもんやさかい』
『おゝよし〳〵、敏ちやんかいな〳〵』
上方流のなめつくやうなアクセントで、よち〳〵歩いてゐる妹の子の手を引いて、姑が入つて來た
須賀子は子供を抱いたまゝ入口の處まで出迎へたが一寸と此方を見たなり、土間から鍵形になつた六疊の方から上つて、須賀子には眼もくれず、敏ちやんにばかり大騒ぎしてゐた。世馴れぬ須賀子は、さうした場合、進んで聲を掛けたものか如何か解らなかつた。たゞ一眼でも、姑が此方を見て呉れたなら、それを機會に挨拶し度いと、手持ち無沙汰に差控へて待つた。
『敏ちやんにお菓子あげまひよかいな、あんたはんお菓子好きだすやろ』
手提袋の中から、紙袋を出して、子供に持たせたりなどした。
『阿母さん、お荷物これだけだすのんか』
先刻車夫の持つてゐた風呂敷包を持つて入つて來た妹を見ると、須賀子は堪らず呼びかけた。
『其枝さん、私阿母さんに御挨拶したいのですけれど……』
『ほう、まだでしたのかいな、まあま』呆れ顔に其處へ坐つて『阿母はん、嫂さんだす』『はあ、さうかいな、初めまして』流石に叮嚀に挨拶したが『來たとも來んとも云うて來いせんさかい、私思ひがけなかつたよつて、誰や解らしまへんのや』
須賀子は誰默つて俯向いた。お互寫眞と云ふものを見た事のない間柄ではあるまいし、淋れ立ての赤ん坊を抱いて斯うしてゐれば、幾ら産後で面違ひがしてゐたからとて、嫁だ位は解りさうなものだと、姑の皮肉な態度が口惜しかつた。
『早う知らさなんだの惡いけんどな阿母はん、狹いさかいに、兄さんとこの家でも出來て、あんじよになつてからと思うてなあ』
『ふん、來たら惡かつたのかいな』
『そないな事おますかいな、阿母はんかて何彼と不自由やおまへんか』
『ほたらまだ家ないのんかいな、何ぼ程の家借りての積りやいな』
『小人數やさかい、自家位なところと思ふとりますのやけんどなあ』
『そやつたら何ぼも其處らにありさうなもんやがな』
云ひながら姑は風呂敷包を解いて、嫁へ土産の玉子の折や、敏ちやんの爲めのエプロンや、元町の賜子に贈る菓子箱や、其枝の好物なので、特に今朝程早起きして作つて來たのだと云ふ草餅や、とうん〳〵に品數を並べ立てた。
『まあ、そんなにたんと、心配しなはらなようおますのに』
『何でや、これ皆な良人と關係あらしまへんのやで』
『厘かて良人の錢で買ふたのやないさかい、だんないがな、皆な私が局長はんとこのおしごとしたげて貰ふた錢や、此頃はもう、良人と夫婦の關係もあらしまへんしな、綺麗なもんや』
『まあま阿母はん、お茶でも入れまひよか』
其枝は起つてお茶の支度にかゝつた。
『敏ちやん、そのいしいし一つお貰ひ、お祖母さんと好い處行きまひよかいな』
『阿母はん、何處行つてのんだす？』
『うん、一寸と其處ら歩いて來ますのや』
姑が出て行くと其枝はお茶を入れてすゝめながら父の死後から再縁して今日までの姑の來歴を、極り惡げに打ち明けた。

『何しろ今の良人と云ふのが薄情な人だすよつて、母も焦れて〳〵、まるでもう前の母ちやないやうになつとりますのでな』

『無理もありませんわね、秋山からよく聞いて知つてますのよ』

さうは云つたが、嫁の自分は兎も角、初めて見る孫に、一言の言葉もかけず、我が娘の子供にばかりチヤホヤする姑に對する感情は、どうしても面白い譯には行かなかつた。××校と云へば、小學校でこそあれ、大阪では有名な學校である。その初代からの校長夫人として、立派に通つて來た人だと云ふのに、如何に乳母日傘で、娘の頃から我儘一杯に育つて來たからとは云へ、あんまり氣隨過ぎるやうにも思はれた。

其日の夕方、六疊の間に食卓を持ち出して、一同揃つて晩のお膳についた。姑と婦人傳道師と、秋山と須賀子と、其枝と主人と差向つた。敏ちやんは父さんの傍に坐つて、須賀子は姑の隣りに、赤ん坊を抱いてゐた。鯛の潮汁の蓋をとつて、一口吸ひかゝつた時姑は突然立つた。

『もういらん！　だんと馬鹿にしなはれ』

三疊の間の障子の隅つこに坐つて、姑はハンケチを顏に押し當てゝゐた。須賀子は何が何だか解らなかつたが、今の聲に驚ろいて、眼りかゝつてゐた赤ん坊が泣き出したので、そつと立つてあやしにかゝつた。直ぐ傍に坐つてゐただけに、須賀子は自分に怒られてゐるのではないかと氣がとがめた。見ると姑の膝は濡れてゐた。

『これ見んか、衣服も何も滅茶苦茶や、其枝餘り馬鹿にしなはんなえ』

人一倍着物道樂な姑の額には青筋が立つてゐた。どし〳〵擦るやうにして濡れた膝を腹立ちげにハンカチで拭いてゐる。須賀子は最初涙で濡れたのかと心配してゐたのであつた。

『阿母はん、何がお氣に障つたのや知りまへんがな兎に角、今日は久し振りで皆が揃つたのだから、機

嫌直して一緒に上つて下さい、其枝の悪い處は、後から又よう云うて聞かせますよつて、な、機嫌直して此方おいんなはれ』

秋山よりも五つ六つも年上の妹婿が、穏やかな調子でなだめた。

『いえ、食べんでもようおます、私まだ猫やおまへんさかい、破れたお椀やなんや性に合ひまへんのや』

妹婿が姑の前の椀を取り上げると、ポタリ〳〵、漏れ殘りの汁が滴つた。

『其枝、家には破れた椀よりなかつたのか』

『あれ、まあ、漏るんだすかいな、つい何とも思ひまへんで、悪い事しました』

『馬鹿！　氣い付けんか、間抜け』

一座は白け切つた。秋山は苦り切つて、押し默つた。婦人傳道師の手前もあり、須賀子はわたゝまれぬ程良人を氣の毒に思つた。

此處まで思つて來ると、須賀子は胸が塞るやうに思つた。

父の存生中は賢夫人と云はれて來たのだけれど、再緣後一年は一年と我儘が烈しくなつて來た。多分は身分の下な、年下の男と一緒になつて、頭の押へてがなくなつた爲めに、持ち前の我儘が增長したのだらうと、秋山は云ひ〳〵した。

須賀子はふと氣がついて指を折つた。所謂女の危險なる年齡ではなかつたのかしらと思つたからである。

『また寒ないの？』

土筆のハカマをとり盡して、秋山は退屈さうに降りて來た。

『え、今寒たところ、ね、一寸と、阿母さんは幾つでしたねえ』

『五十六、いや、五かな、如何して？』

『いゝえ唯』

『前の川つ縁へ土筆でも拔きに行かうか』

『さうね、でも最う無いかも知れないわ』

硝子戸越しに外を覗くと、眼の前をついと燕が飛んで行つた。（なはり）